



▼近頃私たち（50代）より若い図書館活動家と話をしている、ふと断絶感を感じる時がある。それは相手の言うことがまったく解からず、こちらの言うことも通じないというようなものではなく、同じことを話している通じ合っているつもりなのだが、後で考えてみると実は互いに意味が違っているという性格のものなのだ。

いったいこれはどうしてだろうと考えると、思ったより深い世代の違いに行き当たった。図書館員としての成り立ちが違うのだ。

自分がなぜ図書館員をやっているのかというと、本が好きで学生時代からものを書いたり、かつ社会運動に携わったりする人間であり、ある意味で普通の世界では生きていけない（生きたくない）と思っている人間で

あったことが大きい。他の職業を選んだとしても、編集者や書店員であるかもしれないが、会社で経理をやっていたり、役所の企画部門にいたりするのはいまだに考えられない。

ふと図書館活動をしているまわりを見回すと、一定年齢以上は、それぞれ個性的でありながらもやはり同じような種類のタイプが多いことに気がつく。多くの選択肢の中から図書館という仕事を選んだのではなく、否応なしに図書館員にしか成れなかった人たちなのではないか。そして多くが若いときだけにしても、左翼（古い？）活動の経験者でもある。

中小レポート以降の日本の図書館運動は、図書館を通じて日本の社会を欧米のように民主的に作り変えていくことであり、社会運動でもあったと思う。そ

のような中に必要とされたのが、官僚でもサラリーマンでもなく、とはいえ社会に無関心な芸術至上主義者でもなく、いわば革命家、活動家であったのではないだろうか。

しかし世は変わり、図書館の数も増えるとともに、図書館員も社会的に認知され、普通の市民的な職業になってきた。左翼運動の高揚も消え去り、図書館が先頭に社会を変えていこうという意識も薄らいで来た。

今の若い図書館員にもこちらが舌を巻くほど優秀な人はたくさんいる。しかしそれは、学者であったり、優秀な行政マンであったりしてもおかしくないような感じであって、なにがなんでも図書館でなければというような雰囲気と情熱を漂わせている人にはお目にかかったことがない。そしてもちろん左翼では

ない。

思えば私たちも日本の長い図書館員史からみれば、一時的でしかない存在なのかもしれない。当然社会とともに世代も変わっていく。しかし老いてもなお情熱は衰えていない。さまざまな図書館関係誌が、世代交代をしていくなかたえ時代遅れであっても「ず・ぼん」は左翼の図書館誌でありたいと思うのである。「小形」

▼『図書館戦争』、『図書館内乱』（有川浩著、メディアワークス）という本がある。著書はプロフィールに「ちよつと（かなり）怠惰めの主婦」とあるので、女性であることがわかる。ちなみに、名前の読みは「ひろし」ではなく、「ひろ」と読む。結構人気のある本で、町田市立図書館のリクエストは、10月10日現在で、今年の3月に刊行された

前者が43件、同じく9月に刊行された後者が40件ある。

書名に図書館とは直接無縁であるはずの「戦争」や「内乱」などという物騒な言葉を使っていること自体、かなり奇異な感じを受ける。しかも、『戦争』の方は、目次にいきなり「図書館の自由に関する宣言」の正文が登場し、「図書館の自由」がテーマになった小説であるらしいことが分かる。

物語は「昭和最終年度」に施行された「メディアア良化法」とそれに対抗する形で成立した「図書館の自由法」（既存の図書館法全三章に第四章としてそのまま付け加えられたのが、「図書館の自由に関する宣言」の正文である）の「施行から三十年が経過した現代」を舞台としている。「メディアア良化法」を根拠とした検閲（メディアア良化委員会とその「代執行組織」となる良化特務機関）による）がまかり通り、それに唯一対抗する図書館（「専守防衛を基本姿勢として」いるといっても「警備隊を持つ」との間に「抗争」が起こるといふ荒唐無稽な近未来小説である。

地の文章も会話も、団塊の世代である私にとって多少の違和感があるが、読み始めると結構

楽しめる。熾烈な会話の後の地の文章が、内省する心理状態を巧みに追いかけて、繋いでいく手法が面白いと感じた。シリーズ化が決定したそうなので、主人公の笠原郁にかなり感情移入しながら読んでいる私にとっては続きが待ち遠しい。

しかし、ここで紹介するのは、書評のためではない。実は、巻末に挙げられている参考文献に我が『ず・ぼん』の9号から11号と『ず・ぼん』編集委員でもある東條文規さんが書いた『図書館の近代―私論―図書館はこうして大きくなった』（これもポット出版）があったことがうれしかったのである。この事実だけをとりしても、著者の有川浩さんにエールを送りたいと思っている。「手嶋」

▼手嶋さんの紹介している『図書館戦争』は、日常化した出版検閲に抗いつつ市民に資料を提供する図書館、という近未来小説である。軽武装した防衛隊を持った公立図書館が利用者の読書のために国家の合法的強制力と奮闘・対峙している。ありにくい図式だが、体力優れた女子防衛隊員が主人公のラブコメディという表皮をまといつつ、その中では図書館は英雄的な存在だ。オジサン業界人の私には、

ちよつと自虐的ブラックジョーク的にも面白かった。もつと、「図書館の自由」とは市民社会の内部矛盾的で苦いものだ、〈対・国家権力〉で「自由」を語る神話的図式はもう古いのでは？とも、実際の図書館のありようがちやかかされているのと同じ？とも思いつつ。驚いたのは『本の雑誌』二〇〇六年上半期エンターテインメント第一位との標語。一般読者も神話がお好きなのだろうか？ ふだんライトノベル読まないし、そこまでの評価はよくわかりません。そうしたら続編「内乱」では、著者は船橋市西図書館事件の図式をも取り込んできた。「自由」でも「選書」の問題でも著者はよくわかっておいでだ。小説的結構はこちらはイマイチと思うけど。

富山県立事件で創刊し11号目に船橋西事件に立ち会って困難を抱え込み、業務委託や指定管理者という経営の問題に迫られ、肥大化する電算システム問題に頭を悩まし、現実の図書館の動向は難しい。

最近では永嶺重敏氏の明治期の大衆読書文化・読書装置の成立史を読みかじっている。では今後（紙の本を読む）習慣は娘息子世代に受け継がれていくの

か？ ^紙の読書装置Vを越えて図書館は続くのか？ 今村氏の講演はそういう意味でも面白かった。我が『ず・ぼん』うるたえつつ、遠くまで行くんだ……「堀」

▼今年度から短大で司書課程を担当している。はじめての経験だが、なかなかエキサイティングである。いかに学生を眠らせないで90分もたせるか。学生の理解度をどう評価し、成長させるか。また図書館という現場を知らない学生にどうしたら図書館の仕事を理解させられるのか等々、今までは違う視点のことを日々考え続けている。

しかし、「私が教えた学生が図書館で働ける可能性は？」と考えるとき、暗澹たる思いに沈む。年間に多くの司書が全国で誕生する。しかし、図書館で働ける司書は極少数である。ゼミの学生に聞くと「ゼミ図書館で働きたい」という答えが返ってくるのだが……

彼らの思いを叶えられない今の図書館構造は、何に起因するのだろうか。司書という専門的職員を採用する自治体は極めて少ないが、文部科学省は自己矛盾を意識しないのだろうか（この言い方はやぶ蛇か？）。ここでも悩み、考え続けてしまいが、

その「解」を見つづけるのが仕事だと思ふ。

自治体の状況を見ると安い賃金で働く司書も多い。専門の知識を持つといいながらこれほど安く使われる専門職もないだろう。

でも、図書館が好きだという学生も多い。ひとりでも多くの図書館を使える人材を育て、突破口を見つけ出したい。「斎藤」▼僕は孤独依存症かもしれない。身の回りに他人がいると妙に落ち着かないし、仕事中等など腹立たしくなることさえある。一人での仕事が長いせいなのかもしれないが、自分のペースでというより、そのときの気分を優先させているからかな（単なるわがままという声もあるにはある）。

しかし、一人の仕事というのは誰にも邪魔されることなく妄想三昧という特典もある。様々な事を一人で思い巡らせているのも悪くはない。考えてみれば、図書館の書架には妄想の産物があふれているわけだからちやうどいいのかも。

勤務先の学校まで歩いて通う途中にもいろいろな風景に遭遇し、とりとめもない思いをめぐらす材料には事欠かない。歩道の敷石の間から花を咲かせてい

るけなげな雑草、半ば放置された家庭菜園の野菜達から壊れかけた自販機など勝手に勝手な物語を作っては楽しんでる。

そういえば、日本ほど自販機があふれた国はないと聞いた気がする。どうして、こんなに……。でも考えてみれば需要があるから設置するだけなのかもしれない。図書館の存在もどう必要とされているかによってその形を変えるのかもしれない。昨今の図書館を巡る環境の変化も結局のところそんな落ち着き方なのかなとも思ってしまう。まあ、必要とされ方も図書館の姿勢によって変化することも事実だろうが。「真々田」

▼地元（香川県）の文庫仲間の一人から教えられたのだが、有川浩『図書館戦争』『図書館内乱』（ともにメディアワークス）がおもしろい。

ときは未来社会。いつてもこの小説によれば現在から約十数年後。公序良俗を乱し、人権を侵害する表現を取り締まる「メディア良化法」。それに対する「図書館の自由法」。両法の執行機関、メディア良化委員会と図書館との抗争はエスカレーター。互いに武器を持って闘うまでに至る。主人公笠原都は、その武闘の第一線に立つ唯一一人の

女性図書館防衛員。なにがなんでも「図書館の自由」を守る！直情径行、猪突猛進。さて郁の活躍のほどは？

一見、荒唐無稽に思えるこの小説は、しかし「図書館の自由」に関する宣言を徹底すれば、この物語のような展開になっても不思議はないと思わせるに十分な説得力を持つている。『本の雑誌』二〇〇六上半期エンターテインメント第一位というのも頷ける。つい最近出た『図書館内乱』では例の船橋西図書館の蔵書破棄事件を想起させる内容や障害者「差別」にかかわる問題も折りこまれて「あり得る」と思わせる筆力には感心した。

そうそうホントこれを言いたかったのだが、参考文献に私の『図書館の近代』や『す・ぼん』9〜11号が載っている。聞くとところによると、『図書館戦争』十数万部近く売れていて、『図書館内乱』以降も続編が準備されているらしい。期待しているが、その「期待」のなかにはちょっと、私の本や『す・ぼん』も使乘できないかなーという……。

次号は、有川浩さんをお呼びして編集委員と座談会などできたらいいなあと思っっています。「東條」

一度はずれたが、入稿の十日前くらいに復帰しました。今号のなかで一番繰り返し読んだのは、「委託」のコーナー。とても興味深い内容だった。とくに面白かったのは、出席して下さった皆さんの変化。

人間の関係って、本当に複雑で一筋縄ではいかないものですね。未熟者の私は、その難しさ面倒さばかりに目を向けてしまいい、逃げ出したり投げ出したりしてしまうのですが、簡単になつたなら喜んで喜びというものもきつとなくなってしまうのでしょうか。「佐藤」

▼今号より編集に参加することとなりました。皆さま、よろしくお願いいたします。

入社後初めて担当する本で、正直言って図書館をそれほど利用しない私にとってこの役が勤まるかどうか、担当になることが決まった当初多少不安でした。しかし今号の内容は、以前から利用していた書店の話が出てくるなど、入社以前から私と関わりがあったことが出てくるため、不安を完全に払拭するまでには至らぬまでも、好奇心が満たしつつ仕事ができたことは幸い（救い？）でした。

図書館には確かにあまり行かず、行ってもCDを時々借りる

くらいですが、読書量は人並み。それならなぜ行かないのかという、本に線引きしたり付箋はつたりしないと気が済まぬ質なもので。図書館にて借りた本に線引きをしたことはありませんが、私にとってじっくり読む上では欠かせぬ行為。ゆえに神保町や近くの古書店を漁り、ついでに路地裏を散歩したり、猫と戯れたり。

今後は次号の準備または勉強のためにもいろいろな図書館を渡り歩いてみようかな、と思う次第。ただ平日は仕事の終わる頃には図書館は閉館しておりまして……と入稿直前の徹夜明け、眠気と戦いながらこの原稿を書いています。さて仕事終わったら久々神保町にでも……と朝令暮改。「坂部」

▼キオスクで文庫本を買って通勤の行き帰りの車内で読むのが、ここ一年ほどの楽しみ。宮部みゆき、東野圭吾、桐野夏生、角田光代、恩田陸、川上弘美、吉田修一など私にとってのキオス

ク作家たちは、都会の雑踏にうつつの物語を書いてくれる。しかしだ。脳のでっぺんあたりでスラスラ読んでもんだから、時間とともに本の内容の記憶が薄らいでいく。話の筋どころか、自分の友人の話だったのか、本の中に書かれていたセリフだったのかさえ曖昧になっていく。そして再び、わくわくしながら同じ本に手を出してしまうのだ。しかもついぶん読んてから「あれ、なんだか知ってるかも……」と気づくことも多くなってきた。そういう話を中年女友達にしたら、みんな一度はそんな経験をもっていた。そうか、読書する中年女は書籍の販売部数に少し貢献しているんだなあ。「那須」

▼図書館の民間委託や、指定管理者化が進行しています。

これって、生産業がアジアなどに工場を移転させたことと同じような道をたどるんじゃないかって、って思えるんです。

僕は会社で日経新聞を読んでいるんですが、ここ2〜3年、海

外に移転させた工場が一部国内に戻されてるって記事が多くなってる気がします。シャープの液晶テレビは「亀山工場で作りました」なんていううたい文句がヨドバシカメラなどの店先にあつたりします。亀山工場の技術力を表現してるんだと思うんです。

で、国内工場を充実させるのは、技術や生産ノウハウなどを会社に蓄積させたり向上させたりするのが目的だと思われるのです。

出版業界でも、編集プロダクションに丸投げしてるって噂をよく聞きます。わがポットは編集プロダクションもやってるんですが、たしかに「企画を〇日までに出してください」メールを書けるだけの「編集者」が多い気がする。取材対象者とのコネなんかもポットに「蓄積」されるので、その委託を出してる会社にとってホントにいいのかな？と思うことが多い。図書館の委託も、実はこれら

と同じ構造なのではないかな？と思ってしまう。図書館の運営主体から、その技術やノウハウが失われてしまうってこと。

もう一つ気になるコトがある。委託会社で働くひとの質が下がってきてるのではないかってこと。知りあいの図書館員に聞くことだけけど、委託先で働く人の出入りが激しいって。額面21万円程度の契約社員で、昇給もなしといった条件で、急速に拡大した委託の図書館をうめるだけの人員を確保するのは大変だと思う。そうした人数をカバーできるほど、図書館に殉教しようという人がいるとは思えない。なので、いずれ今の「委託体制」はダメになってしまおうのではないだろうか。数年先に、そうした揺れ戻しが来そうだ、というのが僕の予測なのだ。そんなときに、今の『す・ぼん』が役に立ってくれるように、というのが、この編集のポイントなんじゃないかと思っ、この一冊をつくら

たつつもりなんだ。「沢辺」

